

平成 21 年 11 月発行 発行者 砺波カイニョ倶楽部 代表幹事 柏樹直樹
事務局 富山県砺波市表町 14-10 電話 0763-33-6588 天野一男建築工房内

南砺の屋敷林見学会に 28 名

— 良い刺激をいただく —

10 月 31 日（土）午前、南砺の屋敷林見学を行った。好天に恵まれ会員等 28 名が楽しく特徴のある屋敷林にふれた。今回は、旧城端町東部の三軒を見学し、その家の木と付き合い方、こだわり、ご苦労などを聞き、色んな楽しみ方を勉強した。見学したのは、長楽寺・西田弥平さん宅、西明・根井仁一さん宅、北野・和田健さん宅、赤祖父溜池と円筒分水で昼近くに終わった。

庭掃除が清々として楽しい（西田けい子さん）

— 庭木にこだわる西田弥平宅 —

私は五郎丸から嫁ぎ、始めは前の木の庭木をみてびっくりした。亡くなった祖父が木を植えたり、雪囲いの手伝いをよくとめ、その時は不満だった。しかし、今は家の中の掃除より、外の掃除が清々しくて楽しくなった。先代の残したものを次へ伝えたいと思い、自分でも植えたり、掃除はしっかりやっている。風が吹くと、大変だがそれが日課みたいだ。

西田家の特徴は、広い前庭いっぱい庭園樹木が入り、母屋前と東角に二つの池がある。南～西面にスギの大木がそそり立つ、その下には生垣としてサザンカ、アオキの自然態木が入る。ウメやカキがその外側に植えられている。南西風が強くカイニョは大事だと。前庭は太い（古い）ハクモクレン、ヒイラギ、キヤラボク、イトヒバが入る。エンコウスギも植えられていた。庭一面のコケは自然のジュウタンである。庭は、先々代の残したもので、明治の北野大火で全焼し、スギ大木はその火の中をくぐったものだと。前庭に沢山の庭木が入っているのに明るい。池と蔵があり東面に大木がないこと、樹木の組合せで光りをさえぎらないこと。池のまわりや、スギの下にコケと元気なヤブコウジが地面をおおっていた。庭を楽しむ屋敷林のある家であった。



西田さん宅の前庭で話しを聞く

落葉掃除に 3～4 日はかかる（根井多美子さん）

— 重厚で安定した屋敷林 —

祖母が元気で広い屋敷の落ち葉掃除の中心になっている。私は手伝う程度。スギ落葉は燃やすが、ケヤキは堆肥にしている。一風ごとに屋敷一面の落葉の原となり、毎日ホウキを使っている。屋敷をひとまわりするのに 3～4 日はかかる。祖母がやれなくなるとどうしたら良いか心配している。

23 号台風(平成 16 年)で倒れたスギの古株を残しているが、その樹齢は 280 年生。根井家の屋敷林面積は一般の農家の約 4 倍で、スギ、ケヤキを中心とした樹叢。その特徴は、スギの樹齢の異なるものが約 100 本近くあり、西面には、ケヤキの大木が入る。東面にはスダジイ、コウヨウザシ、ケヤキが入る、南面にはスギその全ては実生からのもの。北面にはカキ、ウメなどの果樹。西北面にタケ林。敷地全体にリュウノヒゲ、ハナフユワラビ、ヤブコウジ、マンリョウ、カラタチバナ、オオレン、ツワブキ、ゼンマイが入る。根井家の屋敷林は、大中小木の組合せもよく、重厚で安定した南砺を代表する形だ。造園業も入らず自然態維持されている。むしろスギは、山での育て方を参考に共生・競合をうまく利用されている仕立だ。

帰りに屋敷林内であったユズを 3 ヶ宛土産にいただいた。



根井さん宅の南側スギ中心の屋敷林

雪はカイニヨの掃除機〈和田健さん〉

— 一木一草と一緒に生きる —

屋敷・広間から前庭、その先の借景は見られない。前庭全体に沢山の樹木が盛り上がり、外側を遮へい、全く見られない。先に白い大きい建物が見えては心が安まらないとの理由から。庭の中には馬つなぎのドイツウヒがあり、ウラジロガシ、サンシュウ、アカマツ、その下に中低木が狭しと入る。小さい池があり、和田さんの話の間に愛嬌のある声でカエルが鳴いた。夏にはホタルが乱舞する。クマの糞もあった。沢山の鳥がくる。玄関前は、シユウカイドウが立ち上がり、その下にゼニゴケが繁茂する。また、和田さんはモグラの穴が大事だと——この穴から雨水が入り木の根へ運ばれる。とにかく前庭から裏方の歩道以外には、沢山の草が盛りあがる。一木一草を生かしきっての共生の形だ、その木々の中でアーチェリーの練習である。最少のエリアでやれるスポーツと和田さんの楽しみの一つの紹介が。

母屋の南から西面は、防風林としてスギ、ケヤキ（大木 5 本）が主木となり、クリ、マツ、モミジ、シロダモ、が中木に、その下にカヤ、アオキ、ツバキ、ヒサカキが入る。スギとケヤキの大木によって下草が入らない。その樹木と家との空間が広い。雪のため場として大事だと案内された。和田さんの風情のたしなみ——西陽が窓の障子にタケやカエデのゆれる姿、その動きで風を楽しむ。風がなくてもカエデの葉が動く、揺らぎだ。まさに木ととけあう哲学、いや、平成の良寛さまの境地である。

「ケヤキが家の基礎を持ち上げるようになれば、基礎のコンクリートを壊せばよい」現代への痛烈な一撃だ。その思いでケヤキの恩恵、成長を見守って見える。雪はカイニヨの掃除機、屋根に積もった時、ケヤキなどの枝が折れて落ちてカワラを痛めないし、スンバの大掃除を雪がやってくれる。「雪のおかげだ」と雨樋掃除は年 5 回くらいやる。大屋根には「雨どいヘルメット」をつけた。大変効果はある。

孫の命の教育のあとが屋敷の一角にある。11 体の小板の位牌がある。カラス、カエル、ネコ、タヌキなどの死体を孫と一緒に土に埋め、その上に位牌をたてた跡だ。尽きた命を土に返してやる作法だ。

和田さんは最後に自身の心境として、ドフトエスキーの「キリストも釈迦も信じない、大地に口づけをする」との小説の一端を話し、おだやかな笑をそえられた。また、和田さんは自らの教材にも使われた自宅の樹木と草木の配置図をみんなに下さった。自分の家でもこうした調査をして残しておいたら今を記録にとどめる大事な価値を残すことになるのではと思った。

富山県功労賞をいただく

11 月 2 日県庁大ホールで県功労賞授賞式があり、柏樹代表幹事と天野事務局長が出席した。石井知事から手書きの症状と楯を受けた。賞状の内容に屋敷林の維持保全活動を評価して、特に植樹や掃除の行為が強調されていた。12 月 4 日午後 6 時から散居村ミュージアムで懇親会を計画した。会のこれからのことを大いに自由に語り合う場を予定している。



和田さん宅前庭で話しを聞く

井口の赤祖父溜池

— 水争いをしずめた「円筒分水」 —

井波・城端間の山麓には何本もの水路が入っている。それが左右に流れているためどちらが高くどちらが低いのか迷う。自然流は、城端から井波へ、人工流は井波から城端へ 4/1,000 勾配で井波から流れている。庄川からの水を城端方面へ送っているのだ。

それまでに赤祖父の溜池は最重要な水源だった。今も利用されているが、約 400ha の水田と飲料水に使われてきた。水争いは耐えなかった。それを治めたのが、「円筒分水槽」。これによって水争いを解消した。利用者の数で公平に分水した。溜池からの水をサイフォンで出し円筒で分水した。先人の智恵だ。また赤祖父池のダムは両そでの山からトロッコで土砂を運びつくったものだ。これによって下流 12 集落の命がまかなわれてきた。水田へ冷水を送らないために、上水をとれるような工夫もなされている。まさに先人の苦労のあとであり、心してこの現地に立ち、たくさんの願いや思いを受け止めめぐらせながら見学会を終えた。

最後に砺波カイニヨ倶楽部に県功労賞の報が今朝の新聞に載っていたことを紹介し、柏樹代表が感謝のお礼を付け加えた



井口の円筒分水